



ふるさとの家

或る提案

坂口 禰子

東京に住みついて三年。昨年、母の看病に帰って熊本をあちこち放浪した期間をのぞくと、暑い盛りも冬の雪も、東京で耐えた。息子二人を細い腕に支えて、文学への執念にとりつかれながら、小さなアパートの部屋に暮すことにも馴れてきた。

ふるさととは遠くにはありながら、常に私のなかに在る。それは既に一つの心底の巢になってしまっている。そこへもぐりこむことは、かなしくなつかしく、私は度々、ひそかな逃避をたくらむ。それは、雨の日の独居の侘しい刻であり、紺色の夜の寂しさに耐えかねる時である。息子達は、折々、アルバイトに疲れると、私のふところをなつかしんで慰めにやってくる。私の脇に体をのばしながら、

ら、たまりたまった話を語り、嘆くこともかなしむことも、私の体温にぬくめられて吐きだしてゆく。それで十分慰められ、彼らは爽やかな顔をして、再び外へ出てゆく。

私の狭い部屋には、私の息子だけでなく、他の学生達もくる。また、息子が不図識合った、働く少年もやってくる。ゴンドラと称するものに乗って、高いビルのガラスを拭く少年が、疲れきった顔でやってきて、私の剥いた青森リンゴを噛りながら、私にポツリポツリと話をする。人吉から来ている少年は、息子と一緒にの食卓に加り、本の話をして帰る。玉名の少年もくる。八代は学生達が多く、息子達とビールを飲み、ふるさとの話を熊本弁で賑やかにしてゆく。

私は、彼らとささやかながらあたたかいつながりを持ち、彼らとともに過ごす時を大事にしなから、何時も考えている事がある。

ふるさとの家を、私は持ちたい。「クマモト」でもいいし、「ヤツシロ」でも「アリアケ」でもいい。私は、東京における「ふるさとの母」になる。東京に遊学し、働く青少年達の母になる。彼らは、私のふところであつた身心を休め、デスベレートな状態の折には私に訴え喚くことで、心を満し健康性を取戻し、再びいきいきと出発する。そんな「東京の母」に、私はなりたいたい。いや、既に私は幾人かのそうした子供達を抱き、母親と

してのぬくみを伝えている。

私は、も少し部屋がほしい。彼らが何時帰ってきてても、彼らの寝る場所があり、食べる物のある、あたたかい慈しみの場をひろく持ちたい。そのことを、私は何人かの郷里の人に語り、訴えたことがあった。同調して下さる方もあったが、私の部屋は依然として元のままに狭い。三人寝るといっばいになる。誰か、心ある郷里の方に私は訴えたい。熊本の若い前途のある者達のために、かく嘆きかくなしむ私のために、「ふるさとの家」を提供してほしいと。ふるさとを離れ住む私にとって、それは切実な希望であり、唯一の夢でもある。

東京というかわいた土地に、せめて、「ふるさと」というつながりにおいての一つのオアシスを――

クマモト・くまもと・熊本。  
私は、もはや秋の雨である冷たい細い雨の降る今日、ひそかな哀切な思慕をよせながら、一つの祈願を心から念うものである。(作家)

「鎮魂歌」

亀井聰一郎

山鹿の古墳群、殊に弁慶ケ穴の名は、数年前から度々記事にもなり、好便があれば、いつかは見ておき度いと思いつても、今迄訪れる事なく過ぎて来た。所が雑誌「太陽」で紹介されたそれら

観光熊本

永松 定

安内する図など想像出来るであろうか、そこまで、市側で教育する事は大変であるかと推察するが、温泉と灯籠祭の他に素晴らしい古墳群を持つていながら、その方面の開拓をしないと言う事はまことに惜しいと云う他はない。太陽と神話の国のキャッチフレーズを謳う宮崎に劣るうとも思えぬ民族墳墓の土地、私達の周辺をみすみす埋れさせてよいものであろうか。八代市に入る手前のバス道路に埃を浴びて佇むし気に佇む石の集積。ここを通過する度に思はず祈りたくなる程の痛みを覚えるのは、単に文化財の保存と云う立場だけでなく、これが私達の祖先のつつましやかな祈りの姿であった事か、思いを馳せるからに他ならぬ。

現代絵画が寧ろ稚拙にも見える彼等の彫刻や文様からどれ程の発展をとげたらうか、テクニクは発達しても発想や表現心理は、窮極の所、原始に還えって行くものであろうか。

三角形の配列、同心円の構成、私は何か測々と迫る彼等の肌を香りをさへ親身に感じて、はつきりと今更の如くまごう事なき彼の人達の子孫である自分自身を認識するのである。さきに開いた私のソロリサイタルで、「鎮魂歌」と名づけたその舞踊で私は古代の若者の生と死の祈の中に没我していた。

(九州バレー工学校長)

観光熊本の第一番は、やはり阿蘇山である。世界第一を誇るカルデラ式複式火山ということは言うまでもなく、釈迦の寝姿を思わせる五嶽の遠方からの眺めもさることながら、内市からは望めない根子嶽の幻怪異様のたたずまい、四方に延びる高原の壮大さ、四時絶ゆることなく、而も時々刻々と姿形を変貌しながら吹き上げる噴煙、さては麓に散在する温泉群、そのいづれをとってみても絶讃を惜しまないものにはあるが、これらがひとつに融け合っているところに、言語に絶する豪壮の美が展開される。

私は嘗て、阿蘇山麓の温泉群のことに言及して、湯の谷、栃ノ木、戸下等の南麓の温泉のみ人口に膾炙して、黒川、万満寺、岳の湯等の北麓のそれが余りに人に知られないことを嘆いて、その原因が多岐に交通の不便によるのではあるまいか、と指摘したことがあったが、別府から熊本迄、九重と阿蘇を越えて、九州横断道路が開通した今日に於ては、その点の不都合は解消されたから、これら阿蘇北麓の、人に隠れたような、ひっそりと静かな温泉郷も、やがては浴客の殺到するところとなるであろうことを思えば、却って名残惜しいような気さえされるのだから不思議である。

世界第一の阿蘇山に次いで、山では九州第一の高峰、九重山(久住山)、鎮西八郎為朝が立てこもったという雁回山、お萩山、その向うに、左から右に順を追って言えば、金峯山、二の岳、小岱山、木の葉山、鞍ヶ岳、八方ヶ岳と、単に熊本の市街から見渡せる山のみ挙げても、以上の大小の山々が日夜市民の眼を慰めてくれる。そして市内では、やはりお城と水前寺公園、花岡山、泰勝寺、北園公園、江津湖などは、見逃がすことの出来ないものであろう。

北には山また山の九州山脈の入口になっている球磨地方があつて、伝説に名高い五箇荘、椎葉に続いて、熊本は山国であるとともに、八代平野、肥後平野の米どころでもある。球磨地方は、また古い伝統を伝える文化の地でもあつて、お城と温泉と球磨川下りと川霧と鐘乳洞とで名高い、その中心都市人吉は、風光の明眉と相俟って、古来文人墨客のこの地を訪れるものは多い。

山の次に温泉地を列挙すれば、北は玉名温泉立願寺、山鹿温泉(山鹿)から河内小天、(山鹿)日奈久、(竹田)人吉及び前述の阿蘇山麓の温泉群等、殆んど枚挙に遑ないほどで、温泉国と言われる日本中でも、熊本は優秀な温泉郷である。山国であり、平野の米どころである熊本は、また海の熊本でもある。有明海と玄海灘と天草灘と日本海そのものが、熊本という天然資源の豊かなこの国を取

の古墳群のカラー写真の壮麗な文様と、重厚な石の配置構成は、すっかり私を魅了し、圧倒し尽した。

原始への回帰、古代へのノスタルジア、私の舞踊的イマジネーションが真直ぐに舞台へ結実して行ったのは寧ろ当然と云えるであろう。画家がキャンパスの上に古代人の祈りをデフォルメせずに居られなかったように。私が自分のリサイタルに古墳のセットを置いてみたいと言う欲望に馳られたのは果して不遜であつたらうか。

念願かなつて山鹿の知人の東道で、実地見学をして廻つたのはこの五月の事であつた。

弁慶ケ穴は、傍の保育園で鍵と照明器を借用に及んで入らねばならず、またバス道路沿いとは言え、傍迄行く為には民家の庭を家人に会釈して通らねばならぬ長岩横穴、どこをどう入つていゝかわからず暫く行きつ戻りつして漸く木立の間の道なき路をくぐって崖下に出て仰ぎ見る鍋田横穴、教育委員会の案内板は立てはいても、余程の物好きでない限り面倒になつて途中から引返したくなる。

試みに山鹿市民の誰かに案内を乞うて見ようか、その殆どの人が、どこにあるか御存知あるまい。これは本当に勿慮なく、又口惜しい限りと云わざるを得ない。他県からの観光浴客に、旅館の女将や、女中が、得々として山鹿の持つ貴重な文化財を誇り、求めに応じては気軽に

りまいてる。そして河は菊池川、白川、緑川、球磨川の四大河が、この豊穡の地を潤おしている。

観光地としては、やはり天草島も見逃がすことは出来まい。雲か山か異か越かと詠った頼山陽の昔から、隠れキリシタンの夢の島として名高く、あけぼの明治のロマンチスト、若き日の北原白秋、吉井勇等を初めとして、放浪の詩人小説家林美美子等、数々の文人墨客の遊心をそそったところ。

だが、このように世界最大の阿蘇をかえて、世界各国から殺到する観光客が、ホテル・カッセルその他近代的設備の完備した最新式のホテルが統々市内に建設されたにも拘らず、その割には、市内に宿泊せず、阿蘇山麓の温泉群のひとつにならなだも、宿泊となると多くは遠く別府、雲仙などに逃げ出すような傾きがあるのは一体どうしたわけか。観光熊本としては天草架橋、江津湖の開発等々、するべきことは尚多いだろうが、肥後人のモッコス振りも戦後は大分改つて、いくらか愛想よくはなつたにしても、これをお隣の福岡、宮崎、鹿児島などの人々と較べてみてさえ、思い半ばに過ぎるものがあるのだからして、この点は吾々熊本人たるものお互いに大いに反省する余地がありはしないか、と、ここで、いささか苦言を提して擱筆することにす。

(熊本女子大教授)